

*わがシッドの歌(一)

作者不詳 岡村 一 訳

「伝わっている作品の唯一の写本は、冒頭五十行ほどが欠落していると推定されるが、一三〇〇年ごろに編纂された『カステイリーリヤ年代記』には、それを散文化したと思しい次の一節がある。」

物語にいわく——シッドは親しい人々や一族郎党を残らず呼び集めると、九日以内に国を出よとの王命が下ったことを告げ、そして申しました。

「そこでだ、そなたらのうち、誰がわたしと行をともしする用意があるか知りたい。ともにいこうと申すなら、神、これを多としたまわんことを。もし国に残りたければ、それはそれでかまわぬ」

するとドン・アルバル・ファネスが申しました。これはシッドの従兄弟。

「シッド、われら一同、つき従ってまいり苦楽をともしする覚悟。生きて息災でいるかぎり、けっしておそばを離れませぬ。殿のため、ラバも馬も、金も衣服も惜しみませぬ。まことの味方、忠義の臣として、常に変わらぬお仕えする所存」

すると一同はアルバル・ファネスの言葉に口々に賛同。ミオ・シッドはよく言ってくれたと深く感謝いたしました。

財産をまとめ、一党を引き連れてビバールを立ち去るシッド。ブルゴスへ向かうよう指示いたしました。シッ

ドの目に、ものもなく住む人もいなくなった屋敷、鷹のおらぬ止まり木、長椅子の置かれぬ玄関が映ると……

第一歌

シッドは無言で血の涙を流しながら頭をめぐらし、館を見ました。目に映るのは、錠が取り去られ扉があいたままの玄関。また、空しくたたずむ衣文掛けも……。そこには皮のチュニツクもマントも掛かつておらず、雫も羽がわりを終えた大鷹も止まっておりません。断腸の思いに溜め息をつくミオ・シッド。が、やがて悲しみをぐつとこらえ、毅然とした声で申しました。

「ありがたや主よ、天にまします父よ！　こうして邪な敵どもの術中にはまってしまつとは！」

それから一行は手綱を緩め、馬に拍車を当てました。ビバールの境を出るとき、一羽の鴉が右手にあらわれました。ブルゴスへはいるとき鴉は左手に……。ミオ・シッドは肩をすくめ、頭を振って、

「めでたいな、アルバル・ファネス。われらは追放されたぞ！」

ミオ・シッド・ルイ・ディアスはブルゴスの城市へはいました。六十騎が従っておりしました。シッドを見ようと皆出てまいります。ブルゴスの民がつぎつぎと窓辺に立ちます。誰もが深い悲しみにはらはらと涙を落としながら、異口同音に呟いております。

「ああ、よいあるじに恵まれれば、どれほどよい家臣におなりだろう！」

常であれば誰もが喜んで迎え入れるところ。けれど今はその勇気のある者がございません。それだけドン・アルフォンソ王の怒りがただならなかった。前日、正式な封印のある王の書状が厳重な警護のもとブルゴスに届き、そこにはこう記してありました——ミオ・シッド・ルイ・ディアスに宿を貸すべからず、背いた者は財産没収のうえ両眼をくり抜き、なおそのうえ身も魂も失うであろう、以上まことの言葉と心得るべし——。誰もが深く心を痛めておりましたが、言葉をかける勇気のある者はなく、ミオ・シッドから姿を隠していきます。カンペアド

ルは定宿へ向かいました。しかしきてみると扉は固く閉じられております。アルフォンソ王を怖れてそうしたのでございました、押し破られてもせぬかぎり開くまいと。ミオ・シッドの家臣らが呼ばわつても、中から返事は返つてまいりません。ミオ・シッドは馬を進めて扉の近くへ寄り、鎧から足を抜いて、どんと蹴りました。固く閉じられた扉は、やはりびくともいたしません。そのとき九つばかりの娘が前にきて、

「よき星のめぐりのもと剣を帯びしカンペアドル！ 王様がお禁じになったのです。ゆうべ、正式な封印のある王様のお手紙が、厳重に守られて届きました。扉を開いて殿様の中へお入れするなど、とてもできぬこと。もしそれをすれば家も財産も失つてしまいます。そのうえ顔からは二つの目までも。シッド、わたしたちを酷い目に遭わせても、なんの手柄にもなりません。けれど、どうか神様が尊いお力を惜しまず發揮なさつて、殿様をご加護くださいますよう！」

娘はこれだけ言うと、わが家へ歸つていきました。

王からなにも期待できないと悟つたシッドは、扉の前を離れてブルゴスの城市を進みました。そしてサンタ・マリア大聖堂へ着くと下馬し、ひざまずいて一心に祈願。祈願を終えるとまたたちに馬に乗り、城市の門を出てアルランソン川を渡りました。そうして城市の近くの石の河原で野営の用意。天幕を立てさせ馬をおりました。ミオ・シッド・ルイ・ディアス・よき星のめぐりのもと剣を帯びし人は、いまや誰一人宿を貸す者もなく、石の河原に身を横たえねばならぬ身でございます。忠臣たちに囲まれながらも。まるで森の中にいるかのごとく、こうして夜を過ごします。加えて、ブルゴスの城市で食べものを買うことがいつさい禁じられておりました。ゆえに、たとえひとかけらのパンすら売る勇氣のある者はございません。けれど万事そのないブルゴス者マルティン・アントリネスが、ミオ・シッド主従に酒食を提供いたしました。買ったのではなく持つていたもので、おかげで食べ物心配がまったくなくなり、ミオ・シッドとこれにつき従う人々は皆喜びました。マルティン・アントリネスが口を開きます。お聴きあれ、なんと申したか。

「よき星のめぐりのもと生を受けしカンペアドルよ。今晚はここで休み、夜明けになったらともに発とうと。

わたくしは殿をお助けした。いずれ咎め立てされ、アルフォンソ王のお怒りに触れることになりました。されど殿に従い、無事生きて切り抜けられたなら、早晚陛下はまたおそばに迎え入れたもうはず。たとえそうならなくとも、ここに残していくものなど、なんの惜しいことがございましょう」

ミオ・シッドIIよき星のめぐりのもと剣を帯びし者は申しました。

「マルティン・アントリネス、千軍万馬のつわものよ。わたしが死なぬかぎり、いずれ俸給を倍にしよう。ところで有り金残らず使い果たし、これこのとおり無一文になってしまったのだが、皆のため金が必要。そこで気乗りはせぬがやむを得ぬ、まったく気の進まぬことではあるが。もしも承知してくれるなら、櫃を二つ用意しようと思う。そうしてそれに砂を詰めるのだ。これでずしりと重くなる。それから櫃を模様入りの革で包み、飾り釘をしつかり打ちつける。革は赤革、釘はきらめく金の釘がよい。これからすぐにラケールとビダスを訪ねていて申してくれ、陛下のお怒りを買ひ、ブルゴスでものを買うことを禁じられた、されど手持ちの財宝はあまりに重く、運んでいきかねる、これを抵当に相応の額を貸してはくれまいか、財宝は人目につかぬよう夜陰に紛れて運んでいくてくれ、とな。天も照覧、そのしもべたる聖人方も皆照覧、これは急場しのぎ、本意ならざることだ」

マルティン・アントリネスは、ただちにラケールとビダスのもとへ急ぎました。ブルゴスの城市を進んで城内へはいり、急いで二人を訪ねました。二人はいっしょにいて、さて稼ぎはいくらかと金勘定の真つ最中。やってきたマルティン・アントリネスはそつなく、

「ラケールにビダスよ、どこにいる、わが親愛なる友よ？ 内密の話があるのだが」

三人は急いで場所を変えました。

「ラケールにビダスよ、二人とも約束してもらいたいのだが、これから言うことはひとつ他言無用に願いたい。これからずつと左団扇、貧乏とはおさらばの儲け話をもってきたぞ。カンペアドルが貢物を受け取りにいつて莫大な財を渡された。それは途方もない量だ。その中から値打ちものを、あれもこれもと懐に収めたまではよかったが、あとで露見し咎めを受けてしまった。だが実はな、上物の金の詰まった櫃をまだ二つ隠し持っているのだ。

そなたらもとうに承知しているとおり、シッドは陛下のお怒りを買い、領地も家屋敷も捨てるはめになったのだが、この二つの櫃、持つてゆくにゆかれぬ。持つてゆこうとすれば見つかつてしまうのが落ち。そこでカンペアドルはそなたらに預けたいとおおせだ。これを抵当に相応の金を貸してはくれぬか。櫃を引き取り、たいせつに預かつておいてくれ。ただし二人とも、年内は中をあけて見ぬと約束し固く誓ってもらわねばならぬ」

ラケールとビダスは額を合わせて相談——

「この儲け話を逃す手はない。なるほどなるほどやつはモロの地へいつて、がつぱり懐へ入れたのだとか。なにせしやれにならぬぐらい抜き取つたらしいからな。お宝を抱えていては夜もおちおち寝られまい。櫃を預かり、誰にもわからぬ場所に隠しておこう。——で、シッドでございますが、いくらならよいとおおせで？ 今年いっぱいお預かりするとして、利息はいくら出そうと？」

マルティン・アントリネスの答えはそつがございません。

「ミオ・シッドは相応の額であればよしとなさう。しっかりと櫃を預かつてくれさえすれば多くは望まれまい。だがシッドのもとへは、ほうぼうから食いつめ者が集まつてきている。六百マルコぐらいは必要だろうなあ」

ラケールとビダスは「はい、はい、結構。ご用立て申しましょう」と返答。

「そら、もう日が暮れる。シッドはお急ぎ。金を渡してくれぬか」

するとラケールとビダスは、

「商いとはそうしたものではございません。まずは受け取りそれから渡す、これが習い」

マルティン・アントリネスは、

「よかろう。では二人して名高きカンペアドルのもとへまいるがよい。むろんそのあとそなたらを手伝い、誰にも気づかれぬよう櫃を運んで、無事家まで届けてやろう」

ラケールとビダスは答えて、

「それは助かるでございますな。では、六百マルコは櫃を運び込むのと引き換えに」

マルティン・アントリネスはしめしめとほくそ笑み、ただちに馬に乗ってラケールとビダスを連れて発ちました。途中、ブルゴスの人々の目につかぬよう、橋を避けて浅瀬を渡りました。やがて、それ、名高きカンペンアドルの天幕の前に――。ラケールとビダスは中へはいつてシッドの手に接吻。ミオ・シッドは笑顔を作って話しかけます。「やあ、ラケールとビダスご両人！ すっかりお見かぎりだったではないか。陛下のお怒りを買ひ、国を去らねばならぬしだいとなったが、どうやらそのわたしからいくらか儲けるつもりらしいな。これでご両所は一生貧乏とは縁切りか」

ラケールとビダスご両人はミオ・シッドの手に接吻。マルティン・アントリネスが契約をまとめました――櫃を抵当に六百マルコ融通すること。櫃は年末までしっかりと預かること。期日までは中を見ぬと約束し誓った以上、それを反故にした場合は、もはやミオ・シッドは鏝一文利息を支払う義務を負わぬこと――。マルティン・アントリネスが申しました。

「ラケールにビダスよ、さあ積み込むがよい。持っていてだいにしまっておいてくれ。わたしも金を受け取りについていこう。なにしろミオ・シッドは鶏が鳴くまえにお発ちにならねばならぬ」

ごらんあれ、櫃を積みにかかる両人の笑いの止まらぬあの様子。櫃は屈強なるご両所が持ちあげかねるほどの重さがありました。ラケールとビダスは「金」を預かりほくほく顔。なにしろこれで一生金に埋もれて暮らせると、そう胸算用したからでございます。ラケールはミオ・シッドの前へいつて手に接吻し、

「なにとぞ、よき星のめぐりのもと剣を佩きしカンペンアドル。カステイリヤを去って異郷へ赴いたのちは、さぞやご武運隆盛、山ほど財を分捕られるかと。モロの作る美しい朱色の毛皮のチュニツク、シッド、一着お持ちいただければありがたく存じます」

「よし、わかった――とシッドは胸を叩きました――今この場で約束しよう。もしもあちらから持ってきてやれねば、その分を抵当の利息に上乘せしかまわぬぞ」

「ラケールとビダスの家」

ラケールとビダスは部屋の真ん中に絨毯を広げ、その上に真つ白な亜麻布のシーツを重ねると、三百マルコの銀貨をざつとぶちまけました。ドン・マルティノはそれを目分量で確かめ、重さは計らず引き取りました。金貨でもう三百マルコ渡されました。ドン・マルティノは、そのすべてを供の従士五人に分けて背負わせました。引き取りを終え、さあドン・マルティノが申すには、

「なあ、ラケールにビダスご兩人、櫃はそちらへ渡したな？ 儲け話を持ってきたのはこのわたし。靴下ぐらくれても罰は当たるまい」

ラケールとビダスは二人だけで離れた場所へいき、

「確かに世話になった。礼をはずんでも悪くない。——名高きブルゴスのお人マルティン・アントリネス、ごもつともなお言葉。礼をはずませていただきます。それで靴下や贅沢な革のチュニツク、それにぱりつとしたマントでもお作りなさいませ、お礼に三十マルコお渡しいたしますので。殿にはお世話になりました。これぐらいは当然。契約の証人にもなつていただかねばならぬことでございますし」

ドン・マルティノは礼を言つて受け取りました。そうしてその家から引き揚げようと二人に別れを告げたのち、ブルゴスをあとにしてアルランソン川を渡り、よき星のめぐりのもと生を受けし人の天幕へ戻りました。喜色満面で迎えるシッド——

「戻ったか、マルティン・アントリネス、わが忠臣よ！ いつか報いねばな」

「カンペアドル、なるだけ用心して戻つてまいりました。殿の六百マルコに加え、別にわたくしも三十マルコ手に入れました。夜明けにサン・ペドロ・デ・カルデニャ修道院に着けるよう、今すぐ天幕を畳んで発ちましよう。あちらで、高貴な賢婦人たる奥方様にお会いくださいませ。けれどそこも早々に切り上げて国を出なければ。どうにもいたしかたのないこと。期日が迫っております」

この進言のあと、ただちに天幕が畳まれ、ミオ・シッド一党は馬に飛び乗りました。ミオ・シッドはサンタ・

マリア大聖堂の方角へ馬首を向けると、右手をあげて顔の前で十字を切りました。

「天地を続べたまう神よ、感謝したてまつる！ 栄光に輝く聖母マリアよ、そのお力もてわれを守りたまえ。勅勘をこうむり、今カステイリヤを去りゆくこの身、生きて戻れる日があるかどうかもわかりませぬ。どうかそのお力もてわが旅路を守りたまえ、栄光満てるマリアよ。片時も目を離さず、われを守り助けたまえ。もしも願いを聞き入れ、武運に恵まれたあかつきには、おん身の祭壇に贅沢な供え物を山と積みましよう。なおそのうえ、そこでミサを千回執り行なわせると、そうお誓い申します」

智勇兼備の名将が、心を込め気持ちを込めて別れを告げたあと、一党は手綱を緩めて馬を進めはじめました。ブルゴス生まれのマルティン・アントリネスが申します。

「心ゆくまで妻と別れを惜しんでまいりたいと。留守を守る者たちにもあとのことを申しつけておかねば。たとえ陛下に財産を召し上げられようとかまいませぬ。日の出前には殿に追いついておきましょう」

マルティン・アントリネスはブルゴスへ引き返し、一方ミオ・シッドは一路サン・ペドロ・デ・カルデニャ修道院を指して駆けます。鶏があわただしく時を告げ、夜が明けそめようとするころ、剛勇カンペアドルは心服してつき従うつわものたちを引き連れ、修道院へ到着。その夜明けの時刻、神に仕えるキリスト教徒ドン・サンチヨ修道院長は朝課の最中。そこには五人の忠義の侍女とともにドニャ・ヒメーナの姿もあり、神と聖ペテロに祈りを捧げておりました。

「万人を導きたまう主よ、ミオ・シッドカンペアドルを加護したまえ」

戸が叩かれ、修道院の人々はシッドの到着の知らせを受けました。いや、ドン・サンチヨ修道院長の喜ぶまいことか！ 僧らは手に手に松明や蠟燭を持って中庭へ飛び出してきて、よき星のめぐりのもと生を受けし人を大歓迎。

「いや、これはうれしい、ミオ・シッド！——と、ドン・サンチヨ修道院長は申しました——せつかくおいでになったのだ。ぜひとも当院にご逗留あれ」

シッドは、

「かたじけない、修道院長殿。お言葉、ありがたく存じます。われら主従、腹ごしらえさせていただきました。ところで、このたび国を去らねばならぬこととなりましたが、それにあたり五十マルコご寄進いたしておきます。もしもしばし命永らえることができましたなら、別に同じだけご寄進しましょう。また、貴院に一マルコたりとご迷惑をおかけするのは本意ではない。ここにこうして百マルコ、ドニヤ・ヒメーナの費用としてお渡しいたしておきます。これで妻と娘、それに侍女たちの今年の世話をお頼み申します。お預けしていく娘二人はまだ幼い。たいせつに面倒を見てやっていただきたい。ドン・サンチョ修道院長殿、どうか娘たちをよろしくお願いいたします。妻と娘、くれぐれもお頼み申します。この金が尽きて多少不足が出て、けっして不自由させませぬようにな。お願いいたしましたぞ。お立て替えいただいた分は、四倍にして貴院へお返し申しますゆえ」

修道院長は深くうなずいて引き受けました。そこへ、それ、ドニヤ・ヒメーナが娘たちと……こちらへ歩いてまいります。娘たちはそれぞれ侍女に手を引かれ、シッドの前へ連れてこられました。ドニヤ・ヒメーナはカンペアドルの前に両の膝をつくと、はらはらと涙を流しながらその手に接吻し、

「どうすればよいのでしょうか、よき星のめぐりのもとと生れいでしカンペアドル！ 邪な讒臣のせいであなは国を追われる。どうすればよいのでしょうか、ああシッド、立派なおひげの人！ お前には、ここにこうしてわたくし、そして年端のゆかぬ幼いあなたの娘たち、それにわたくしに仕えてくれるこの侍女たちも。見れば旅立ちの様子。こうしてあなたと生き別れにならねばならぬとは。後生でございます、お教えくださいませ、どうすればよいのか！」

美髯公は手を差し伸べてわが子らを抱きあげ、愛情のほとばしるままひしと抱きしめました。はらはらと流れ落ちる涙、漏れる深い溜め息。

「ああ、ドニヤ・ヒメーナ、そなたはまこと得難い妻。どれほどたいせつに思ってきたことか！ それがこのとおり生き別れ。わたしは去り、そなたはここに残らねばならぬとは。神よ、聖母マリアよ、この娘たち、この

手で嫁させたまえ！ その日までわたしに運を授け、この命、しばし永らえさせたまえ！ 貞淑な妻よ、そなたにもよい思いをさせてやらねばな」

剛勇カンペアドルに心尽くしの馳走が供され、修道院の鐘が高らかに打ち鳴らされました。

他方、ミオ・シッドⅡカンペアドル国を去るの報がカステイリヤじゅうを駆け巡ると、家屋敷を捨て領地を捨て、その日百十五騎がアルランソン川にかかる橋に集い、口々にミオ・シッドⅡカンペアドルの居場所を尋ねあいました。そこにマルティン・アントリネスが合流し、ともによき星のめぐりのもと生まれいでし人のいるサン・ペドロ修道院へ向かいました。ビバールの武人ミオ・シッドは、一党の人数が増えたと聞くと、これぞ身の誉れと馬に飛び乗って迎えに出ました。一行の姿が目にはいったとき、口もとに笑みがこぼれました。一行はシッドの前になると、かわるがわる進み出てその手に接吻。ミオ・シッドは喜び勇んで申しました。

「よくぞ家屋敷を捨て領地を捨て、わたしのもとへ馳せ参じてくれた。霊のおん父たる神に祈ろう、この命あるうち、一同に多少なりと報いることができるようにと。一同が捨ててきたものを倍にして返させたまえと」

一党の数が増えたことはミオ・シッドにとって喜びであり、すでに一党に加わっていた者たちにとっても同じでございました。

退去のため与えられた日数のうちすでに六日が過ぎ、残り三日となっておりまして。そう、たった三日！ 王はミオ・シッドの監視を厳命しており、仮に期限を過ぎて国内で捕まえようものなら、たとえ万金を積まれても赦さぬつもりでございます。日が暮れ夜の帳がおりるころ、ミオ・シッドは一党の全員に集まるよう命じました。

「一同、気を落とさず聞いて欲しいのだが、手持ちの金は多くない。だが、ともかくこれを皆へ配ろうと思う。おのおの、なすべきことをよく自覚しておいてくれ。明朝、鶏が鳴いたらきびきび動いて馬に鞍を置くのだ。サン・ペドロ修道院では、徳の高い修道院長が朝課の鐘を打ち鳴らし、われらのためミサを執り行なってください。これは聖なる三位一体のミサとなる。それが終わりたい出立だ。期限は近い。道のりは遠い」

各人、ミオ・シッドの言葉どおり行なうはでございます。

夜が過ぎ、朝が訪れようとしておりました。二番鶏の声を聞き、一党は鞍を置きはじめました。朝課を告げる鐘があわただしく打ち鳴らされるなか、ミオ・シッドと妻は教会へ向かいます。ドニヤ・ヒメーナは祭壇前の階にひざまずき、ミオ・シッドにカンペアドルを悪しきことどもより守りたまえと、万物の造り主たる神に一心に祈りました。

「ああ、栄光に輝く主よ！ 天にまします父よ！ あなたははじめに天と地を造り、三日目に海をお造りになりました。次に星と月を造り、地を温める太陽をお造りになりました。あなたは聖母マリアのご胎内に宿り、ベツレヘムでお生まれになりました、それがみ胸であつたゆえ。羊飼いらはあなたを褒め称え、東方の三賢者メルキオル、カスバル、バルタザルは来たりてあなたを礼拝し、黄金と乳香と没薬を捧げました、それがみ胸であつたゆえ。あなたはお救いになりました、海へ投げ込まれたヨナを。あなたはお救いになりました、獅子どものうごめく怖ろしい牢獄よりダニエルを。あなたはお救いになりました、ローマで聖セバスティアヌスを。あなたはお救いになりました、偽りの訴えより聖女スザンナを。

霊のおん父よ、あなたは三十二年のあいだこの世にあつて、人が語るべき奇跡の数々をあらわしました。あなたは水を葡萄酒に、石をパンに変え、ラザロを蘇らせたまいました、それがみ胸であつたゆえ。ユダヤ人どもにわが身を捕らえさせ、カルヴァリオの丘というところ、ゴルゴタなる場所で十字架につけられたまいりました。そのとき、左右とともに十字架にかけられていた盗賊二人。一人は天国にあり、もう一人はその門を潜れませんでした。

あなたは十字架上でも、まこと偉大なる力をお示しになりました。生まれつき盲であつたロンギヌス、槍であなただの脇腹を突いて流れ出た血は、その柄を伝つて流れ落ち、手を濡らしました。その手をあげて顔を触ると目が明き、あたりを見まわしたロンギヌス、そのときあなたを信じ、おかげで悲運より救われました。墓にあつたあなたは復活し（……）陰府へおくだりになりました、それがみ胸であつたゆえ。あなたはその門を破り、義人をお解き放ちになりました。あなたは王の中の王、万人の父。あなたを衷心より崇め信じます。——聖ペテロにお願い申し

あげます、ミオ・シッドはカンペアドルを悪しきことどもより守りたまえとの神への願いに、なにとぞお口添えくださるようと。——今日別れ別れになるわたくしたち、生きてふたび会う日を迎えさせたまえ！」

祈願は終わり、やがてミサも終了。一党は教会を出て、いよいよ馬に乗ろうというところ。シッドはドニヤ・ヒメーナを抱きしめました。ドニヤ・ヒメーナはシッドの手に口づけ。心もとなさにドニヤ・ヒメーナの目からはらはらと涙がこぼれ落ちました。シッドは幼いわが子らを見やり、

「娘たちよ、そなたらのことは神に、霊のおん父に託そう。こうして別れ、今度いつまた会えようなあ」

声なき涙をとめどなく流しながら、断腸の思いで家族は別れました。

ミオ・シッド主従は馬に乗りはじめました。全員が乗りおえるのを待つあいだ、幾度も振り返るミオ・シッド。ミナーヤ・アルバル・ファネスが叱咤いたしました。まこと当を得た言葉でございました。

「シッド、日ごろの覇気はどうなさった？ 殿はよき星のめぐりのもと母御のご胎内より生れ出たお方ではありませぬか。さあ、われらの道を進みましょう。未練がましいことはやめだ。やがてこの悲しみが、そっくり喜びに変わるときがまいります。われらに魂を与えたもうた神が、きつとお助けくださるに相違ない」

ドン・サンチョ修道院長は、ドニヤ・ヒメーナと二人の娘、そして母娘に仕える侍女の一人一人に至るまで、たいせつに世話をするよう念を押されました。あわせて、礼は十二分にする、確かに約束するとの言葉も繰り返されました。戻ろうと背を向けるドン・サンチョに、アルバル・ファネスが声をかけます。

「修道院長殿、われらに加わりたいたとやってくる者があれば、跡を辿って追っていけとお伝え願えませぬか。いずれどこかで追いつけようからと」

一党は手綱を緩め進みはじめました。国を去らねばならぬ日が迫っております。その日はエスピナソ・デ・カンまでいき一泊。その夜、つわものたちが四方からぞくぞく駆けつけてまいりました。翌朝カンペアドルはふたたび出発。二心なき家臣が国を追われていきます。威容を誇る城市サン・エステバンを左手に見て進むと、やがて右手には塔の林立するアリロン、モ口の城市。それからアルクビリヤを過ぎれば、そこはもうカステイ

リヤの果て。なおも進んでキネーア街道を横切り、ナバス・デ・パロスのあたりでドウエロ川を渡り、フィゲルエラへ至つて、ミオ・シッドは野営にかかりました。引き続きいたるところからつわものが集まつてまいます。夕食のあとシッドは身を横たえました。心地よい眠気に襲われ、深い眠りに落ちたとき、大天使ガブリエルが夢枕に立ちました。

「いざゆけ、シッド、万夫不当の猛将よ。かほどめでたき門出はない。そなたがこの世にあるあいだ、めでたく運ばぬものはない」

夢から覚めたシッドは顔の前で十字を切りました。顔の前で十字を切り、神に一身を託しました。夢のお告げに胸が躍りました。翌朝ふたたび出発。その日は期限の日。さあ、もうあとはない。次はミエデス山中で野営するつもりでございました。日暮れ前、まだ明るいうちにミオ・シッドカンペアドルが一堂の人数をあたらせると、徒の猛者は別にして三百人。各騎、旗をつけた槍を持つておりました。

「万物の造り主たる神の救いが一同にあるよう！ 馬には今のうちに飼葉をやっておけ。食いたい者は食い、そうでない者は騎乗せよ。これから山越えをする。山は高く険しいが、これで今夜のうちにアルフォンソ王の国を出ることができる。それからあとも、跡を追つてくる者があればわれらを見つけられよう」

夜の山越え——くだりにかかったのはしらしら明けのころ。やがてミオ・シッドは鬱蒼たる深い森の中で一同に野営を命じ、馬に飼葉を与えさせ、かつ夜行軍の予定を告げました。皆いづれ劣らぬ忠臣揃い。異議を唱える者など一人もおりません。主命はなんであれ従う覚悟でございます。

やがて暗くなるまえに出発。ミオ・シッドが夜行軍を決めたのは、人に気づかれぬためでございます。休息なしの夜の強行軍。やがてエナレス河畔のカステホンというところの近くへ至ると、ミオ・シッドは一党ともに身を潜めました。よき星のめぐりのもと生を受けし人は、ミナーヤアルバル・ファネスの進言に従い、その晩はそのまま動きませんでした。

「いかがでございます、よき星のめぐりのもと剣を佩きしシッド。カステホンへは皆で朝駆けし、しかる

のち殿はわが勢より百騎を率いて(……)

「そなたは二百騎率いて遠征にいくがよい。アルバル・アルバレス、アルバル・サルバドレスはむろんだが、荒武者ガリーン・ガルシアも連れてゆけ。ほかにも猛者どもをつけてやる。勇猛果敢に暴れまわれ。怯んでなにも奪いそこねてはならぬ。イタをくだり、グアダラハラを抜け、アルカラまでも蹂躪し、奪って奪って奪い尽くせ。モロどもに怯んでなにも奪いそこねてはならぬ。わたしは百騎を手もとに置いて後詰めを務め、カステホンをしつかり押さえて守つていよう。遠征の途中で危うくなったら、すぐさま後詰めへ、わたしへ知らせてよこせ。スペインじゅうの語り草になるほどの加勢をしてやるぞ!」

遠征にいく者と、ミオ・シッドのもとで後詰めにあたる者が分けられました。

そら、夜が明ける……朝の訪れ……日が昇る……ああ、なんと光り輝いていることか!

カステホンでは起きたした住民が城門を開き、作物や畑の様子を見に外へ出てまいります。皆出たあと門は開きっぱなし。そのうえ中にはわずかな人数しか残っておりません。外へ出た者たちは思い思いの方向へ散つていきました。カンパアドルは潜んでいた場所から姿をあらわしますと、カステホンの方角へ一直線に駆け、モロの男女を捕まえ、周囲にいた家畜を片端からかき集めました。やがて城門へ馬首を向けるミオ・シッド・ドン・ロドリゴ。自分たちへ向かつてくるのを目にした門番どもは、恐れをなして逃げ去りました。ミオ・シッド・ルイ・ディアスは城門を潜つて中へはいり、抜き身を手にモロどもを追いまくり、十と五人を討ち取りました。こうしてカステホンを奪い、金銀を得たのでございます。そのうちに家臣らも分捕つたものを持つてやつてきて、なんの惜しげもなくミオ・シッドへ差し出しました。

さて、その後遠征に出た例の二百と三人。果敢に駆けまわり(……)ミナーヤの旗はアルカラまで達しました。そうしてそこから、分捕つたものを携え引き揚げにかかります。エナレス川沿いに駆けのぼり、グアダラハラを抜ける。山のような分捕り品——牛、羊、衣類その他おびただしい財物。ミナーヤの旗は威風堂々翻り、追いつがる勇気のある者など一人半人もおりません。この成果をあげて遠征隊は帰還。カステホンへ到着すると、そこ

ではカンペアドルが待つておりました。シッドは城の守りを万全にしておいて、馬に乗り、手勢を従えて迎えに出ました。両手を広げてミナーヤを迎えるシッド——

「戻ったか、アルバル・ファネス、そなたはまさしく一騎当千！ 任せてまちがいのない男だ。持ち帰った分と前の分とを合わせ、よければ全体の五分の一をそなたに与えようではないか、ミナーヤよ」

「名高きカンペアドル、お言葉、まことにかたじけなく。わたくしにやろうとおおせのその五分の一、カステイリーヤのアルフォンソ王へご献上申せば、さぞかしお喜びいただけようかと。お申し出はご辞退いたします。なにとぞご放念を。わたくしにとつては、頼もしきわが愛馬に打ち跨り、いくさ場で心ゆくまでモロと戦うほうが先。名高き閼將ルイ・ディアスの馬前にて、槍を振るい、剣を抜き、肘を伝つて敵の血の滴り落ちるまでに。神に、天にましますお方にお誓い申します、それまでは殿から鏢一文頂戴いたしますまい。微力を尽くし、なにがしか財と申せるほどのものを殿に得ていただくまで、そのときまでその五分の一は殿がお収めを」

分捕つてきたものがその場に集められました。アルフォンソ王の軍勢が押し寄せてくるのではないか、王が全軍を率いて征伐にあらわれるかもしれない、そうした考えがミオ・シッドよりよき星のめぐりのもと剣を佩きし人の頭をよぎります。ミオ・シッドは、得たものを残らず分配せよ、役目の者はどう分けたか書き留めておけと命じました。これで騎馬の者はひと財産得ました。各自銀百マルコの割り当て。徒の者にはちようどその半分が配られました。全体の五分の一は、鏢一文欠けずミオ・シッドの手もとへ。しかしその場所では売るもならず贈るもならず。捕らえた男女も一党とともに連れていくわけにまいりません。そこでカステホンの者たちと話したうえで、イタとグアダラハラへ使いを出し、支払つてもたつぷりもとがとれる額でかまわぬとの申し出を添え、その五分の一をいくらか買う用意があるか尋ねさせました。するとモロ側は銀三千マルコと見積もつてまいりました。ミオ・シッドはこの額で承知し、金は三日後確かに渡されました。

ミオ・シッドとその一党は、このままカステホンには居続けられまいと判断いたしました、防御はできても水の便に難があると。

「約定書が作られている以上、このモロは敵ではない。アルフォンソ王が全軍を率いてわれらを征伐にこよう。カステホンから退去するにしかず。——聴いてくれ、ミナーヤよ、近臣たちよ。これから申すこと、不承知でなければありがたい。カステホンにはこのままいられまい。ここはアルフォンソ王から近く、征伐においでなされるに相違ない。だが、城市を傷めるのは本意ではない。退去にあたつては、モロの男女百人ずつを解き放とうと思う。城市を奪つたことで、かれらに悪く言われたくない。一同、分け前は受け取つた。一人も漏れてはおらぬはず。明朝、発とうではないか。アルフォンソ国王陛下はわが主君、できれば干戈を交えるのは避けたい」

シッドの言葉に異論は出ませんでした。おのおの富を手にして奪つた城から去っていくシッド一党を、モロは総出で祝福いたしました。

その後一党はエナールス川の川筋を上流へ向かつて駆けに駆け、アルカリアを突つ切つて進み、アンギタの洞穴地帯を通り、川を渡り、カンボ・タランスへ至ると、そこを馬蹄を轟かせて駆けくりました。ミオ・シッドはその日の野営地を、アリーサとセティーナのあいだに定めました。途中、各所で分捕つた財物はおびただしい量にのびりました。モロ側は、シッド一党がなにをめざしているか計りかねておりました。翌日ビバールの武人ミオ・シッドはふたたび移動。アラーマを望みつつ過ぎ、溪谷をくだり、プビエルカ、その先のアテカを経て、アルコセルに近い要害の地、まるく大きな丘に陣取りました。そこは近くをハローン川が流れていて、水を断たれる心配がありません。ミオ・シッド・ロドリゴはアルコセルに狙いを定めたのでございました。

ミオ・シッドは丘にでんと腰を据えると、手勢の一手を山側、もう一手を川へ向けて配置し、堅陣を構えました。次によき星のめぐりのもとと剣を佩きし剛勇カンペアドルは全員に命じ、川に接するように丘の周囲に堀を掘らせました。奇襲に対する備えに万全を期し、かつそこから動かぬ構えであるのを示すため。この報は一円に伝わりました——ミオ・シッド・カンペアドルが、キリスト教徒の地を追われモロの地へやってきて、かの場所に腰を据えた——。あたりでは野に働きに出なくなりました。ミオ・シッドは一党とともに威圧をつづけ、やがてアルコセルの城市は貢納をはじめました。アルコセルにつづいてアテカ、そしてテレールの城市も同じくミ

オ・シッドに貢納を開始。カラタユドにとつては、さあもう衝撃というもおろか。

ミオ・シッドがその場所に拠点を定め、まる十五週が経過いたしました。ミオ・シッドは、アルコセルが開城に应じるつもりがないと見ると、一計を案じ、ただちに実行に移しました。天幕をひと張りだけ残してあとはすべて畳ませ、鎧を着用し帯剣した姿で、旗を掲げてハローン川沿いに下つてまいつたのでございます。まさに知恵者、相手を畏にはめるための機略。それを目にしたアルコセルの者どもの、なんと馬鹿な喜びよう！

「ミオ・シッドめ、兵糧も飼い葉も尽きたのだ。四苦八苦して天幕を担いでいくのはよいが、なんとひと張りお忘れだ。まるで落ち武者と変わらぬさま。追いかけていつて大儲けしてやれ。テルエルの子どもに遅れを取るな。先を越されたらこつちには鏢一文まわつてこないぞ。取られた貢物を倍にして取り戻してやろうではないか」

アルコセルから目の色変えて飛び出してくるモロども。ミオ・シッドはそれを尻目に見ながら退却する体を装つて駆け、ハローン川の下流の方向へ進んでまいります。一党と駆けくぐります。アルコセルの者どもは「それ獲物を逃がすな！」と口々に叫びあいながら、われもわれもと外へ飛び出してまいります。奪い取りたい、ただその一心。城門は開け放したまま。守る者は誰一人おりません。剛勇カンペアドルは振り返つて、相手が城からたつぷり遠ざかつたと見て取ると、旗手を反転させました。全騎激しく拍車を入れます。

「かかれ、者ども！ 皆、怯むな！ われらに天祐神助あり！ 富はわれらのもの！」

一党は野のまつただ中で追手に襲いかかりました。ああ、その日の朝の一同の武者震いのさま！ 真つ先駆けるはミオ・シッドとアルバル・ファネス。いずれの馬も駿馬、それはもう思いのままに駆けます。やがて二人は相手と城のあいだにまわり込んだ。一方ミオ・シッドの家臣らは敵に容赦なく襲いかかり、たちまちその場で三百人を討ち取りました。その一方で伏兵となつていた一隊がありました。このときその一隊は本隊をあとに残し、大喊声をあげながら城へ向かうと、抜き身を引つさげ城門のあたりに陣取りました。やがて敵を打ち負かした味方が到着。ミオ・シッドは、実にこうした策を用いてアルコセルを奪つたのでございました。

ペロ・ベルムデスが旗を手にやつてきて、城の高み、てっぺんに立てました。ミオ・シッド＝ルイ・ディアス

「よき星のめぐりのもと生を受けし人は申しました。」

「これも天にまします神と、なみいる聖人方のおかげ。これからは人馬ともにましな場所で寝起きができればいいものだ。——アルバル・ファネスはじめ一同に相談がある。この城を手に入れ大きな富を得た。モロは死屍累々、生き残った者はわずかだが、この男女、売るもならず、かといって首を刎ねたところでなんの益もあるまい。それよりわれらがあるじとなったこの城に入れ、わが家としたこれらの家で使うのが得策ではあるまいか」

アルコセルに入城して財を得たミオ・シッドは、丘に残っていた天幕を取りにいかせました。

アテールカにとつては大きな痛手。テレールにとつてもおもしろからぬ事態。カラタユドも同様。三つの城市はバレンシア王へ使者を立て、ミオ・シッド・ルイ・ディアス・デ・ビバルなる者が、アルフォンソ王の不興を買い国を追われてやってきて、アルコセルを狙つて要害の地に陣を構え、ついには策を弄して城市を奪いました、と訴え、

「もしもお助けいただかねば、陛下はアテールカ、テレールも失われましょう。カラタユドもまた同じ。しよせんは逃れられませぬ。そうなればハローンの川筋は総崩れ。次はあちら側、ヒローカ川沿いも同じ運命を辿ろうかと」

タミーン王は口上を聞いて怒髪天を衝きました。

「今わがかたわらに控える將軍三名のうち二名、即刻発つてあちらへ向かえ。三千騎にいくさ支度させて率いてゆけ。国ざかいを守る者どもにも加勢をさせよ。シッドを生け捕り、わが面前に引き据えよ。わが領土に押し入った罪、きつと償わせてくれるぞ！」

こうして進発した三千騎、日暮れにソゴルベに着き宿営。翌朝進軍を再開、セリヤに到着して宿営。国ざかいを守る部隊へ伝令が発せられました。われ遅れじと各地から兵が馳せ参じてまいります。翌日軍勢はセリヤ、いわゆるセリヤ・デ・カナルを発ち、終日休まず進み、その夜はカラタユドで宿営。四方へ陣触れがなされると、ファリス、ガルベというこの二人の將軍のもとへ雲霞のごとき大軍が馳せ参じ、いよいよ剛勇ミオ・シッドの守るアルコセルを囲みに向かいます。

モロ勢は天幕を立て野陣を張りました。膨大な人数が集結し、ますます勢い盛ん。モロ軍の立てた見張りは鎧兜に身を固め、四六時中目を光らせておりました。びっしりと配置されたその見張りの背後には、底知れぬ数の軍勢が控えておりました。モロ勢はミオ・シッド方に対し、さっそく水を断つ作戦に出ました。ミオ・シッドの家臣たちは打って出ようと逸りましたが、よき星のめぐりのもと生を受けし人は、それを固く禁じました。こうして囲まれたまま、まる三週間が経過。三週間が過ぎ四週目にかかるころ、ミオ・シッドは家臣団と軍議を開きました。

「水は断たれ、やがて兵糧も尽きよう。夜陰に紛れて抜け出そうにも蟻の這い出る隙もない。といつて戦いを挑むには多勢に無勢。さあ、どうすればよい。考えを聞かせてくれ」

あつぱれるもののふミナーヤが口火を切りました。

「大カステイーリヤを追われこの地にあるわれら、モロと戦わずしていかにパンを得られましょう。なるほどわれらは六百余人、されど誓つて思案の余地などあるはずもなし。明朝を期して打って出るべし」

するとカンペアドルは、

「わが意を得たり。さすがだ、ミナーヤ。そう申ししてくれると思つていたぞ」

この密議が漏れぬよう、モロを全員城外へ出すよう指示が出されました。それから一同、片時も休まず支度を急ぎます。

翌朝、まもなく日の出という時刻、ミオ・シッド以下全軍がいくさ支度を済ませておりました。指示を出すミオ・シッド。それ、このように――

「城門の守りに徒の者二名のみ残り、あとは全軍一丸となつて城外へ打って出る。いくさ場で斃れば城をとられ、勝ちいくさならいつそう富を積む。――そなた、ペロ・ベルムデスよ、わが旗を持て。そなたは一騎当千、あずけてまちがいあるまい。だがこの役目を与えるからには、よいと言うまで旗を突出させてはならぬぞ」

ペロ・ベルムデスはシッドの手に接吻して旗を受け取りました。

城門が開かれ、いっせいに外へ押し出します。それを目にした見張りが後方へ急を知らせますと、モロの陣営

の動きがにわかにあわたしくなりました。鎧兜を身にまとう。戦鼓を打ち鳴らす。その響きに大地は鳴動せんばかり。それ、モロ兵がいくさ支度し、つぎつぎと隊伍を組んでゆく。軍勢の中に二旒の大將旗が立てられ、それぞれのもとに軍団ができあがつていく。各軍団に翻るさまざまな旗——いやその数の夥しいこと！ やがてモロ勢はミオ・シッド主従を捕らえようと、進撃を開始いたしました。

「皆、この場、このところを動くな。命じるまで飛び出してはならぬ」

しかしかのペロ・ベルムデス、逸る気持ちを抑えかねました。シッドの旗を握り締め、馬に拍車を入れんとしつつ、

「万物の造り主たる神のご加護を、至誠の人シッド・カンペアドル！ あの本隊の真つただ中に殿の旗を立ててごらんにいれる。主従の義理を立てるべき人々よ、旗をお守りあれ。お手並み拝見！」

カンペアドルは「待て。ならぬ！」とめましたが、ペロ・ベルムデスは、「是非もなし！」と言い捨て、馬に拍車を当てて敵の本隊へ突つ込んでいきました。イスラム方は迎え撃ち、旗を奪おうと怒濤のごとく攻めかかったものの鎧袖一触。「加勢を！ 急げ！」と叫ぶカンペアドルの声に、全騎、盾を胸の前に構え、旗をつけた槍を水平に倒し、体を鞍の前橋の上へ傾け、勇猛果敢に突進。よき星のめぐりのもと生を受けし人は大音声をあげました。

「かかれ、者ども！ 全身全霊を傾けよ。——われこそはルイ・ディアス、シッド・カンペアドルなり！」

全騎ペロ・ベルムデスの奮戦する本隊めがけ突進。槍はその数三百。そのどれにも旗がひらめいております。各騎、一撃で一人ずつを仕留め、反転してさらにもう一騎ずつ討ち取りました。あれ、あのようにあまたの槍が構えられ、立てられ、あまたの盾が貫かれ、貫き通され、あまたの鎧がちぎれ、ねじ切れ、あまたの槍旗の白地が血で赤く染まり、あまたの太く逞しい馬があるじを失ってさまよい、モロは「ムハンマド！」と叫び、キリスト教徒は「聖ヤコブ！」と叫び——。たちまちのうちに千三百のモロの死体が転がりました。

ミオ・シッド・ルイ・ディアス、万夫不当のつわものよ。黄金の鞍に打ち跨りて、縦横無尽に敵を討つ！ ソ

リータ領主のミナーヤ・アルバル・ファネスにマルティン・アントリネスに頼もしきブルゴス者、シッドの養子たるムニョ・グステイオスにマルティン・ムニョス・モンテ・マヨール治める者、加えてアルバル・アルバレスにアルバル・サルバドレス。アラゴン男児ガリン・ガルシア、カンペアドルの甥のフェレス・ムニョス、さらに加えてそこに轡を並べるつわものども、こぞつて旗をば守り、ミオ・シッド・カンペアドルをば守ったり。

ミナーヤ・アルバル・ファネスは馬を殺されましたが、味方がすばやく駆けつけました。ミナーヤは折れた槍を捨てて剣を抜き、徒立ちながら果敢に斬りまくります。それを見たカステイリヤ戦士ミオ・シッド・ルイ・デ・アス、良馬に跨る一人の敵に馬を寄せ、右手に持った剣を太刀風鋭く一閃すると、相手は腰から真つ二つ。地面に上体が転がりました。シッドはミナーヤ・アルバル・ファネスに馬を渡しながら、

「乗るがよい、ミナーヤ。そなたはわが右腕。今日のこの日、そなたにはおおいに助けてもらわねばならぬ。モロ勢は手強い。いまだいくさ場より落ちてゆかぬ」

ミナーヤは剣を手に馬で敵勢の中へ駆け入って奮戦。追いつくはじから討ち取っていききました。他方、ミオ・シッド・ルイ・デ・アス、よき星のめぐりのもと生を受けし人は、敵将ファリスに三太刀。二度までは外しましたが三度目は仕損じず、鎧を血が流れ落ちました。いくさ場を脱しようと馬首を返すファリス。この一撃が戦いの勝敗を決しました。一方マルティン・アントリネスはガルベを剣で一撃。兜のてっぺんを飾るルビーが飛び散り、刃は兜に食い込んで頭まで達しました。もう一太刀待つ勇氣は、いや、とてもない。こうしてファリス、ガルベ両将は敗走し、モロ勢は総崩れ。キリスト教世界にとつてはまことめでたい日となったのでございます。追撃に移るミオ・シッド軍。ファリス將軍はテレールへ逃げ込みましたが、ガルベはそこに入れてもらえず、カラタユドめざして死に物狂いで駆けました。カンペアドルはガルベを追い、カラタユドまで後を追っていききました。駿馬に跨るミナーヤ・アルバル・ファネスは、逃げるモロを三十と四人まで討ち取りました。快刀乱麻、腕は真紅に染まり、血が肘から滴り落ちます。ミナーヤはひとりごちました。

「いや、めでたい。ミオ・シッド・ルイ・デ・アス、野戦に勝利との吉報がカステイリヤへ届くことになる」

モロどもは果敢に追撃され、討ち取られていきました。無数の死体が転がり、生き残った者はわずか。やがてよき星のめぐりのもと生を受けし人のつわものたちは、引き揚げにかかります。太くたくましい愛馬の背に揺られるミオ・シッド。兜下には鎖のかたがくつきりと。それにしてもその髯の、いやなんという見事さ！ シッドは鎖頭巾を背中に垂らし、抜き身を手に、味方がぞくぞく集まってくるのを眺めながら、

「神に、天にましますお方に感謝したてまつる！ おかげでわれら大いくきに勝利した！」

このあとミオ・シッド軍は、イスラム方の陣営に残されていたものをかき集めにかかりました。盾などの武器をはじめ財物が山のようにございます。追撃から戻って見つけたモロの軍馬は五百十頭。味方の討死にが十五人を出なかつたことは、キリスト教徒の人々にとって大きな喜びとなりました。持ち帰った金銀も莫大な量。キリスト教勢はこれだけの財物を得て、誰もがおいに潤いました。アルコセルのモロたちは、ふたたび城内へはいることを許され、あまつさえミオ・シッドの指示により、いくばくかのものが与えられました。家臣らと大きな喜びを分かちあうミオ・シッド。やがて金そのほかの莫大な財物の分配を命じました。ミオ・シッドは軍馬百頭をわが取り分とし、家臣ひとりひとり、それに徒の兵、騎馬の兵へ、まこと手厚く報いてやりました。よき星のめぐりのもと生を受けし人の分配は公正で、従う誰もが満足。

「これミナーヤよ、そなたはわが右腕。天に賜ったこの財物から、わが手で好きなだけ取るがよい。ところで、カステイーリヤへ使いつてはもらえぬか。われらがこの度のいくさに勝ちを収めた、そうお知らせしてきて欲しいのだ。また、わたしは陛下に国を追われている身ながら、軍馬を三十頭ばかりご献上申したく思うのだ。一頭一頭鞍を置き、とりわけ立派な馬銜と手綱をつけ、鞍橋からは剣をひと振りずつ下げてな」

「かしこまりました」と、ミナーヤはアルバル・ファネスは答えました。

「それからここに金銀を用意した。長靴に縁までいっぱいに詰めてな。ブルゴスのサンタ・マリア大聖堂へ寄つて、ミサ千回分の寄進をしてきてくれ。残りわが妻と娘たちへ。折りに触れわたしのため祈ってくれるよう伝えてくれ。もしも生き永らえることができたなら、三人には栄耀栄華を味わわせてやるつもりだ」

役目に勇躍するミナーヤ・アルバル・ファネス。供の面々も選ばれ、夜には馬に飼葉が与えられました。ミオ・シッド・ルイ・ディアスは旅立つ者たちと申し合わせました。

「いゝか、ミナーヤ、大カスティーリヤへ。われら天祐を得ていくさに勝った、そう友の人々に胸を張れるな？ 帰ってきたとき、われらがここにいればよし。そうでなければ居場所を探して追つてこい。われらは馬上、糧を得るほか道はなく、もしそうせねば地味の瘦せたこの土地で生きてはいかれまい」

準備万端整え、翌朝ミナーヤは発つていきました。カンペアドルが家臣と残るその土地は、なるほど地味が瘦せ、ことのほか作物の実りの悪い土地でございました。

国ざかいのモロもバレンシアのモロも、シッドの動静に日々神経を尖らせておりました。ファリス將軍は傷が癒えると評定を重ねました。他方アテカ、テレールの城市、中でも一頭地を抜くカラタユドの者たちは、寄り合つて次のように見積もり、それを文書にいたしました。すなわち、アルコセルを銀三千マルコで買い取つたのでございます。アルコセルへ戻つたミオ・シッド・ルイ・ディアスは、家臣に対し実に手厚く報いてやり、おかげで騎馬のつわものも徒のつわものも相当の富を得ました。もはやシッドの軍勢の中に赤貧をかこつ者など、ただの一人も見つかりません。寄らば大樹の陰とやら。

ミオ・シッドが城市を去るとき、モロは総出で別れを惜しみました。

「いつてしまうのか、ミオ・シッド！ 皆であなたのため祈つてゐる。殿よ、一同、あなたのはからいをありがたく思う」

いよいよビバールの武人ミオ・シッドがアルコセルを去ろうというとき、涙を流さぬモロは一人もおりませんでした。

旗を掲げ、カンペアドルは出発。ハローン川沿いをくだります。前へ駒を進めていきます。ハローン川を離れるとき、鳥がおおなる吉相をあらわしました。テレールの城市は喜びました。カラタユドはさらに。シッドから大恩を受けていたアルコセルが悲しんだのとは反対に。ミオ・シッドは駒を進め、先へ先へと進んでいき、そ

して最後はモンレアル近くの丘に腰を据えました。その丘は高く大きく、さあ、どこからも攻められる恐れのない絶好の要害。シッドはまずダローカ、それから転じてモリーナ、さらにその先にあるテルエルに貢納を誓わせ、同様にセリヤ・デ・カナルも手中にいたしました。ミオ・シッドルイ・ディアスに神の恵みあれ！

さてミナーヤルバル・ファネス——。カステイリーヤへ使いし、王に軍馬三十頭を献上いたしております。王はそれを見てにこりと微笑み、

「これは誰がくれたものだ？ 教えてくれぬか、ミナーヤよ？」

「よき星のめぐりのもと剣を佩きしミオ・シッドルイ・ディアス。陛下、シッドは先のいくさでイスラムの將軍二人を打ち破り、莫大な富を手に入れました。誉れ高き陛下、その中よりこれをご献上しあげるしだい。シッドは陛下のおみ足と両の手にご接吻申し、伏して君寵を乞い願いたてまつると」

王は申しました。

「まだ早かろう。王の寵を失い追放された者、三週間ばかりで赦すわけにはゆかぬ。だが馬は、モロから奪ったものとあれば受け取っておこう。のみならず、ミオ・シッドがそれほどの富を得たこと、うれしくすら思うぞ。加えて、ミナーヤよ、そなたを赦そう。封土も土地も返してつかわす。王国との行き来も勝手次第。今日よりこれを許す。だがシッドルカンペアドルについては、まだなにも言うまい。ミナーヤよ、さらに申しておく。わが王国じゅうの勇士勇者で、ミオ・シッドに加勢したい者があれば好きにしてかまわぬ。土地も召し上げぬ」

ミナーヤルバル・ファネスは王の手に接吻し、

「国人のあるじたる陛下、幾重にもお礼申しあげます。今はこれをしてください、先ではまたさらなるお慈悲をおかけくださるのではと」

「ミナーヤよ、通行を許すゆえ、安んじてカステイリーヤ内を通つてゆけ。ミオ・シッドのもとへ帰り、富を積むがよい」

さて、よき星のめぐりのもと剣を佩きし人へ話を戻します。シッドが陣を張ったくだんの丘は、のちのちまで

「シッドの丘」と文書に記されることになりましたが、シッドはここを本拠として広く荒らしまわり、マルティン川の川筋一帯に貢納を約束させました。シッドの動きはサラゴサへ伝わり、モロはおもしろからぬ事態に震撼いたしました。シッドがその丘を本拠としてまる二週間が経過。知仁勇備えた武人は、ミナーヤがなかなか戻らないのを見て、全軍を引き連れ夜陰に紛れて移動。陣を払って丘をくだり、テルエルを過ぎ、テバルの松林に腰を据え、その一帯をしらみつぶしに荒らしまわりました。これでサラゴサも貢納することに。シッドがこれだけのことをおえてから三週間後、ミナーヤがカステイリヤから戻ってまいりました、剣を帯びた者を二百人連れておりました。徒の者となると、いやもう数えきれぬほど。ミオ・シッドはミナーヤの姿を遠目に見るや、馬を飛ばして駆けていって固く抱擁。そして口にて、目に接吻。ミナーヤがなにことも隠さずあらうざらうざらう報告すると、カンペアドルはにこりと微笑み、

「これぞ神のお恵み、その尊いお力の賜物だな！ そなたがいてくれるかぎり、万事ならざるはなしだろうな、ミナーヤよ！」

こうして帰ってきたミナーヤ、アルバル・ファネスが、各自の残してきた親類縁者の言づてを伝えると、ああ、つわものたちの喜びはいかばかりであったか！ ああ、美髯公の喜びはいかばかりであったか、アルバル・ファネスからミサ千回分の寄進をしてきたと聞いたとき、そして妻と娘の言づてを聞いたとき！ ああ、シッドはどれほど満足し、喜びをあらわにしたことか！

「そうか、アルバル・ファネス、実によくやつてくれた！」

よき星のめぐりのもと生を受けし人は、それからたちに行動を再開。アルカニス一帯を草木も生えぬようなありさまにし、その周辺をもことごとく略奪してまわり、出撃した本拠地へ三日後に帰還いたしました。

やがてこの報が一帯を駆け巡り、モンソンとウエスカの城市は頭を抱えました。一方、サラゴサは胸を撫でおろしておりました、すでに貢納しているので、ミオ・シッド、ルイ・ディアスからならんら危害を加えられる心配もないと。

分捕ったものを携え帰陣。運び込まれた財物の山に、陣営は喜びに沸きました。ミオ・シッドは満足、アルバル・ファネスは大満足。知仁勇兼ね備えた人は笑みを浮かべ、皆に申しました。話すべき潮時でございました。

「聴いてくれ、一同！ そなたらにまことのことを言うが、動かざる者は身上を潰す。明朝、ここを動かうではないか。陣を払って先をめざそう」

こうしてシッドはアルカント峠へ移動。そこを根城にウエーサとモンタルバンを襲撃いたしました。この遠征に十日を費やしました。報が四方へ伝わりました——カステイリヤを追われてきた者が城市をつぎつぎ馬蹄にかけている——。四方へ伝わった報は、バルセロナ伯の耳にも飛び込みました——ミオ・シッドことルイ・ディアスが伯の領域を手当たりしだいに荒らしまわっている——。伯は顔に泥を塗りおつたと、怒り心頭に発しました。空威張りが服を着て歩いているような人物である伯は、このときもまた大言壮語。

「ミオ・シッド、ビバルのやつめには、以前ひどい無礼を働かれた。わが宮廷で赦し難い狼藉、甥を殴打し、あまつさえそのあと償わぬ。今度はわしが保護しておる地を荒らしまわるか！ やつめには戦いを挑んだ覚えもなければ、和平を拒んだ覚えもないぞ。だが望みとあれば償わせてくれるわ！」

こうして強大な力を誇る伯のもとへ、われ遅れじと兵が集結。やがてモロとキリスト教徒からなる大軍勢ができました。軍勢はミオ・シッド、ビバルの勇者を追って三日と二晩行軍したのち、テバルの松林で追いつきました。いざシッドめをわが手で生け捕りにせんと伯の鼻息荒らし。ミオ・シッド、ドン・ロドリゴが山のような分捕り品を携えて山をくだり、麓へ着こうというとき、ドン・ラモン伯の使いがやってまいりました。その口上を聞いてミオ・シッドは自分からも使者を立てることにし、

「伯へはこうお伝えせよ。悪くおとりになるな、伯のものはなにも奪っておらぬ、このまま無事いかせていただきたい、と」

それを聞いた伯は、

「しらを切るか！ 以前の所業、この度のふるまい、まとめて償わせてくれるぞ！ 流れ者め、誰の顔に泥を

塗ったか思い知るがよい！」

使いた者は泡を食つて戻つてまいりました。こうしてビバールの武人ミオ・シッドは、ここは一戦交えねば済むまいと腹を括りました。

「一同、聴け。分捕つたものはいったん置いて、急ぎ支度せよ。鎧兜を身に着けるのだ。ドン・ラモーン伯がキリスト教徒とモロの大軍を率いて、われらに大いにくさをしかけにくる。お相手せねばどうあつてもお許し願えぬ様子。先へいつてもどのみち追つてくるのであれば、いつそこでお相手申そうではないか。馬の腹帯を固く締め直し、鎧兜を身に着けよ。あちらは皆長靴を履かず、華奢な鞍に跨り、腹帯緩めて坂をおりてくる。われらはいくさ用の鞍を置き、靴下の足に長靴を履こう。あの軍勢ならば百人あればこと足りる。坂をくだりきるまえにしかけるのだ。なに、ひと突きすれば鞍三背を空にできよう。ラモーン・ベレンゲル、われらが分捕つたものを奪おうと跡を追つてきたのはよいが、今日このテバルの松林で、その相手が誰か思い知らせてやるぞ」

ミオ・シッドの言葉が終わつたときには、誰もが支度を終え、槍を手に馬に跨つておりました。やがてカタルーニヤ勢が坂をくだつてくるのが見えてまいります。軍勢がくだりきつて平地にさしかかうとしたそのとき、ミオ・シッドよりよき星のめぐりのもと生まれいでし人が「かかれ！」の号令を発すると、全騎勇躍して突撃。槍旗を翻しつつ槍を縦横無尽に振るゐ、かつは手傷を負わせ、かつは落馬させました。よき星のめぐりのもと生まれいでし人はこの戦いに勝ちを収め、ドン・ラモーン伯を虜にいたしました。またその際、銀千マルコでも買えぬ名剣コラーダを獲得。この戦いの勝利により、シッドの武名はさらにあがつたのでございます。

シッドは捕らえた伯をわが幕舎へ連れていき、小姓らに見張りを命じておいて、ふたたび外へ出しました。散つていた味方が集まつてまいります。山のような分捕り品に満足げなミオ・シッド。やがてミオ・シッド・ドン・ロドリゴのため、贅沢な馳走が用意されました。ドン・ラモーン伯はそれを見てせせら笑いしました。伯にも料理が運ばれてきて、前に並べられました。手をつけようとしなればかりか、見向きもいたしません。

「スペインじゅうの富をやると言われようが、ひと口たりと食うものか。それぐらいなら、いつそ肉体を捨て、

魂を捨てようがまし。こんな檻樓を着た者どもに不覺をとるとは情けない」

すると、お聴きあれ、ミオ・シッド・ルイ・ディアスが申すには、

「伯よ、この食べ物召しあがれ。さあ、この酒も。言うことをお聞きになれば解き放つてさしあげますぞ。だが意地を張れば、もう一生キリスト教徒の地へはお戻りになれますまい」

伯は申しました。

「そなたは食べて腹でもさすつておればよい、ドン・ロドリゴよ。こつちはこのまま死んだほうがまし。誰が食べてなどやるものか」

三日目まではなだめてもすかしても聞き分けません。分捕った夥しい金品を皆で分けあっていたあいだ、ひとかけらのパンさえ口に入れさせることはできませんでした。ミオ・シッドが申しました。

「ひと口なりと召しあがらぬか、伯よ。聞き分けねば一生このまま。だが、よいと言うまで召しあがれば、殿と二人のお方、解き放つて自由の身としてさしあげますぞ」

これを聞いた伯はしだいに顔がほころんでまいますぞ」

「今申したこと、シッドよ、もしもほんとうにやつてくれるなら、一生恩に着るぞ」

「では、召しあがれ、伯よ。食べおえたら殿とあのお二方、解き放つてさしあげましょう。ただしお断わり申しておきますが、殿がいくさで失われたもの、わたくしが勝ち取ったものは、鏝一文お返しできませんぞ。苦勞をともししているこの家臣らのため入り用ですぞな。殿から奪い、ほかのだれかれから奪つて糊口をしのいでゆく。こうした暮らし、いつまで続くかわかりませぬが、陛下のご勘気をこうむり国を追われた身である以上、いたしかたありません」

伯はすっかり元気になり、手を洗う水を求めました。水は前に運ばれてきていて、即座に差し出されました。伯はシッドが返してやった二人と雁首並べて食べだしましたが、いや、なんとうまそうに食べることに！ よき星のめぐりのもと生を受けし人はそばで見ながら、

「よいと言うまでたらふく召しあがらねば、ここでわれらと暮らすはめになりますぞ。おさらばできませぬぞ」
言われて伯は、

「ああ、喜んで食つてやるとも！」

伯は二人の貴族とがつがつ食りました。ドン・ラモン伯の手の、まあよく動く動く！ ミオ・シッドはその様子を上機嫌で眺めておりました。

「ミオ・シッド、どうだろう。われらはいつ出立してもよいが。馬をくれたらすぐにでも発ちたい。それにしても伯になつてこのかた、これほど美味に感じた覚えがない。この食べ物の味は一生忘れまい」

ひとときわ見事な鞍を置いた乗用馬三頭と、チュニツクやマントの立派なものが与えられました。ドン・ラモン伯は二人の貴族のあいだにはいりました。カステイリーヤ戦士は陣營の端まで送つていき、

「さあ、おいきなされ、伯よ、とびきりカタルーニヤ人らしく！ 残してゆかれる品々には感謝申しあげる。もしも負けた恨みを晴らそうと思ひ立ち、わたくしを探しにおいでになることがあれば、逃げも隠れもいたしませぬ。奪うか奪われるか勝負いたしましょう」

「安心せよ、ミオ・シッド。そなたは安泰。そなたへの今年の分の払いは済ませた。このうえそなたを探し求めるなど思いもよらぬ」

伯は拍車をあて、後ろを振り返り振り返り見ながら去つていきました。ミオ・シッドの気が変わりはせぬかと心配していたのでございました。卑劣な行ないとは無縁の高潔な武人、たとえ万金を積まれようとありえぬことでございます。

伯は去つていき、ビバールの武人は引き返して家臣たちと集まり、いくさで得た、それはもう途方もない分捕り品の分配をはじめました。めいめいが手にした財物は山のように。いったい自分がどれほど持っているのか、見当もつかぬほどございました。

* 翻訳は次の定本に基づいて行なった。 *Cantar de mio Cid*. Ed. de Alberto Montaner, Barcelona, Crítica, 1993. 訳者は以前に同じ作品の訳を出版した（『わがシッドの歌』一九九六年、近代文藝社）。これは R. Menéndez Pidal の定本に基づくものであるが、その後右記の A. Montaner によるより精密な定本が出た。また、前の訳は作品が旅芸人により口演されたという事実を十分に反映していなかった。この二つの理由により、今回新たに全面的に訳し直した。